

随 想

良い英文を書くために

—論文を英語で書くこつ (3)—

氏 家 信 久\*

6. 前置詞, 熟語, 熟語動詞

- (1) Mom what did you bring that book  
I didn't want to be read to  
out of up for?

ママ、なんでボクが読んで欲しくない本なんか持つて来たのさ

- (2) A. He thinks of his home more than  
of his wife.

彼は、奥さんのことよりも、家のことを気に懸ける。

- B. He thinks of his home more  
than his wife.

?

- (3) This is the sort of English  
up with which I will not put.

余は、そのような英語を容認するものではない。

どの国語にも熟語、慣用語・慣用句があり、その国語の表現を豊にしている。中でも英語はその最たるもので、種類、数ともにほとんど無数といつて良いくらいあり、—ほんの一例を挙げれば、McMORDIE の “English Idioms: How to Use Them” は、本文 322 頁、Index 27 頁もある。—彼等はそれを自由に駆使し、時には新語を創造して、情報伝達を行つているのである。

上記の 3 例は、その非常に良い例で、(1) は Nurnberg<sup>5)</sup> が採録した、寝る前にお母さんが読んであげようと持つてきてくれた本が気に入らないと、駄々をこねている子供のせりふ、(2) は、家庭崩壊直前の男の悲劇、そして、(3) は GOWERS 卿<sup>2)</sup> による、かの Winston CHURCHILL の言葉である。

この場合問題になるのは、皆さんが良く御存じのとおり、ある動詞、形容詞、名詞は、ある特定の意味や動作を表すのに、或る特定の前置詞をとること、そして特に、前置詞が動詞、形容詞、または名詞と、ある特定の形に組み合わされると、各構成語からではちょっと推測できかねる意味が生まれることである。すなわち、文例 (1) の read to~ (〜に声を出して読み聞かせる)、read out of~ (〜から読む)、及び (2) の think of~ (〜のことを考える、に心を配る) が前者の例で、一方、(1) の what for (何故) と、(3) の put up with (我慢す

る、容認する) が、いわゆる熟語 (idiomatic phrase) と呼ばれる後者の例である。

英語の前置詞は、日本語のテニオハのようなものであるが、より複雑怪奇なので、厄介である。例えば、read out of (=read from) を read 誰々 out of と間違えると、“誰々を除名する” になつてしまふし、read in (を読みふける) に対して、read into は“解釈する、曲解する”、read on は“読み続ける”であり、そして、think of に対して、think about は“何となく考える”で、注意集中の度合が違う。

従つて、この種の前置詞は、a、まず、字引きをひいて、正しいものを使うことが前提で、次に、b、下手に省略しないこと、が大切である。文例 (2—B) はその悪い例で、イ. more than の次の of が省略されていると読むか、または、ロ. his wife の次の動詞 (この場合は、助動詞の does) が手抜きされているとするかで、意味が全く変わつてしまふ。すなわち、イ. だつたら、(A) の粗雑版ながら同じであるが、ロ. の場合は、“オクさんも家のことを考えているが、ダンナの方がずっと深く考えている。”と、これは単なる程度問題にはかならない。つまり、ロ. は、このままでは、何とも解釈不可能で、真相は前後を読んでみなければ分からない—読んででもわからないことも多い—、科学技術論文では許せない、あいまい文なのである。不用意な of の省略が、致命的な欠陥となつた例として、見ていただきたい。

ここで特に御注意願いたいのは、what for と put up with で、what for の方は、“何のために⇒何故”と理解できないことは無いが、put up with ときたら、昔ながらの put up (Longmann Dictionary of Contemporary English には、1. raise (旗を揚げる)、2. put in a public place (告示を掲げる)、を始めとして、15 種の意味が記載してある。) に with が付くとなぜ“文句も言わずに我慢する”になるのか、我々には、いや、とうの英語国民にも、全くわからないのである。彼らは母親と友達から自然に教えられ、我々は頭から覚え込むほかは無い。

さて、英米の雑誌に投稿された原稿が、“We suggest you use idiomatic English.” と、ケチというほどでは無いが、editorial comment 付きで返つてきたご経験をお持ちの方が多いのではなからうか。それは、正に上のこと、つまり、「そんな難しい言葉を使つてくれるな。もつとやさしく書けよ。」との意味で、具体的には、上例では、torelate の代わりに、put up with を使えと言つていのである。(ただし、put up with は、まだ完全に formal word の status を獲得したとは言えないので、科学技術論文にはお薦めできない。) 今世紀の始め頃から、平易に、平易にの方向へと evolution を続けてきている英語を国語としている彼らにとつては、激烈な

\* 石川島播磨重工業(株)技術研究所 Dr. Eng.

入学試験で鍛えられた我々の英文は、彼らの嫌う big words—より日常語に近い、平易な言葉や言い回しがあるのに、わざわざデカイ語や表現を選ぶこと—が多過ぎて、いうならば、戦前の勅語のような漢語・カナ文を読まされているような気がするのである。

これに関して、この種の熟語動詞に、phrasal verbs などといった、いかにも“原語があつて、その colloquial な言いかえ”の nuance を持った名称ではない、もつとれつきとした名前を付け、れつきとした status を与えようとする動きがある。例えば、有名な出版社である Mcmillan Publishing の編集局の人達は、これらを two-word verbs と呼び、普通の動詞と全く同様に取扱いを提唱している<sup>5)</sup>。この本は、わずか 132 頁の小冊子に過ぎないが、401 ものエントリーを収録し(内、50% 弱が科学技術論文にもよく使われるもの、また約 6% が informal 語)、それらの使いかたが解説されて居る。put up with に関連して例を挙げれば：

put across *sep* cause (an idea or suggestion) to be understood or accepted

put away *sep* store : put in its proper place

put off *sep* postpone

put out *sep* extinguish ; inconvenience (someone)

put up *sep* preserve (food in sealed containers) ; receive as an overnight guest

put up with+obj tolerate

が、組合せの結果、原義が変わつてしまつた two-word verbs として選ばれている。この内、put off と put out は、科学技術論文にも、現に良く使われている熟語である。(上記で *sep* は分離動詞の意味。)

ここで注意すべきは、これらの熟語の中の前置詞は固定されしまつていて、前置詞としては働いていないから、見掛け上同じ語を二回使わなければならないケースがあることである。例えば、道で車を動かしているとして：

slow down (inseparable, すなわち自動詞的用法) では、

The car slowed down down the street.

一車は、道をくだつて(向こうの方へ行きながらの意)減速した。—

slow up (separable, すなわち他動詞的用法) なら、

He slowed the car up up the street.

一彼は、道をあがつて(向うから手前の方へ来ながら)減速した。—

と、down 及び up は繰り返される(二回目の up, down は、下り坂、上り坂の意では無く、“道に沿つて”+その時の気分で決める方向)。もちろん、こんな awkward な文章は歓迎すべきではなく、Up the street, the car

slowed down. とか、もう一工夫が必要である。

実は、英語には、前置詞で終えるのは良い作文ではない、とする教えがずっと昔からあり、一皆さんの相当数も、そう教わっているのではないだろうか、一上の引用(1)と(3)は、それに対する反論として、この二人の高名な実戦的英作文の指導者が取り上げたものである。特に(3)では、この put up with という熟語動詞は3語連続で、すなわち inseparable で、使うのが原則であることを、前述した古い教えに従つて、無理に分けて見せたのが、Fowler<sup>1)</sup> 一巻を常に座右に置いて、正しい英語にうるさかつたと伝えられる、Churchill 一流の皮肉なのである。

つまり彼は、現代英語、特にその会話や口語体で書かれた文章は、前置詞を文末に持つてきてはならないなどとする古い制約から解放されいつそうの自由度を得た難しい言葉を使わずに、やさしい言葉で自由に表現できるようになつた、英語は生きているから、時代の要請に従つて変化する、それを止めてはならないと主張しているのである。

それはあたりまえだ。我々の日本語だつてそうだ。新しい言い回し、新しい熟語をデッチあげ、その中から斬新な、良い表現を create して行くのは、それを国語とする者の義務ですらある。しかし、ここで注意すべきは、この種の言葉は、日本語でも英語でも、ほとんどが colloquialism から出ているから、“平易”などというよりも、“くだけた”言い方になつてしまうという危険性があることだ。つまり、全体的にこの調子で書かれていけば、それはそれで結構—それができる向きは、この小文をお読みにはならないだろう—。だが、それが生兵法で使われると、具体的には、紋付羽織袴の調子で書かれている論文の二、三カ所だけにこの種の表現を使うと、それは“へんな外人”になつてしまうのだ。

特に我々は、英語というものを、英米系国民の国語、つまり生きた文化語、としてでは無く、ラテン語、次いでフランス語がかつてそうであつた、政治、商業、そして科学技術交流のための国際語として位置づけている。その我々にとつて、前置詞がひとつ違えば、意味や nuance ががらりと変わつてしまう英語の熟語動詞は、大体において敬遠するのが無難で、上の put off, put out では、やはり postpone, extinguish を使つて、誤解を予防する方がいいというのが、科学技術論文を英文で執筆する場合の私の結論である。

#### ま と め

(1) 科学技術論文でも、自信のある方は、どしどし phrasal verbs や ideomatic expressions を使つて書かれたが良い。ただし、しかるべき大きい字引をひいて、その phrase なり expression なりが、informal ではないことを確かめること。

(2) 自信のない方は、大学入試で鍛えた、難しい

方の語が使われたが良い。英語国民がどう思おうと、その方が誤解が生ずる危険性が少ない。

(3) それでも referee がまだ文句をつけてきたら、言つてやんなさい: “Read the last chapter of Professor Potter’s ‘Our Language’<sup>6)</sup>, and appreciate that your having to read my un-English English is a part of your price of your having not to learn this awfully amorphous lingo!”

文 献

1) H. W. FOWLER: A Dictionary of Modern Eng-

lish Usage, 2nd ed. (1965) [Oxford University Press]

2) Sir E. Gowers: The Complete Plain Words (1971) [Penguin Books Ltd.]

3) 氏家信久: 鉄と鋼, 67 (1981), p. 200

4) M. NURBERG: Questions You Always Wanted to Ask about English (1972) [Pocket Books, New York]

5) The Key to English Series: Two-Word Verbs (1964) [Macmillan Publishing Co., Inc., New York]

6) S. POTTER: Our Language (1966) [Penguin Books Ltd.]

コ ラ ム

“ですな症候群”

「最近ですな、テレビとかを見たりしてもですな、まあ非常に気になることがですな、あるように思うわけであります。」「まったくおつしやる通りですな、皆さんどうしですな、“ですな”や“わけであります”を多発するのでしょうか。話をしている本人はですな、全くそのようなことにまあ気がついていないとかように思います。特にですな、話すことのプロであるですな、政治家とか、放送記者とか、解説者・司会者を始めとしてですな、やはりテレビの前に立つとですな、どうもいつそうひどくなるようです。」

「この点についてですな、担当の課長さんに伺つて見たいと思います。」「関係機関としてもですな、この“ですな症候群”のですな、まん延につきましては早急に抜本的な対応策をですな、構ずる必要ありと認めてはいるのですが、やはり何といてもですな、国民一人一人がですな、自覚することが根本的な解決ですな、手段であるとかように考えておるわけであります。」

「つぎに有名大学の教授にですな、一つ話を伺いたいと思います。」「そうですな、やはりですな、話すべ

き内容がほとんどない、こういつた場合にですな、時間をうめようとする、これが第一の理由であると思えます。もう一つのですな、理由といたしましてはですな、自分の話す内容に自信がなく相手の同意をですな、確めなければ不安である場合になると思えます。まあ、こういつた場合にかかるある種のアレルギーだとかように思っております。」「最近のヤングにですな、みられるいわゆる語尾を上げる話法もですな、また you know を多発するですな、英語の上手な人もですな、症状は異なっておりますが、まあ、全く同じですな、病根であると思われわけであります。」「晩酌をですな、毎晩やつてもですな、アル中とはいえませんが。適量の“ですな”は話をつなぐですな、気付薬と思われわけであります、あまり多いとかえつて聞き苦しいものになるわけです。」「私はですな、逆にですな、自分もこの病気にかかっているのではとですな、心配しすぎることを方をですな、専門家といたしましてはですな、まあ非常に心配しているわけであります。」「どうも貴重な御意見ありがとうございました。」

「この原稿がですな、冗長だということですから、ぼつにならなければと思っております。」

(東京工業大学精密工学研究所 鈴木朝夫)